

## いま、体育教師に求められる「教師力」とは

若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾 主宰 仲島正教

### 1. 体育教師のイメージは？

「私は『体育教師の地位を高める会』会長の仲島です」。

私は若い頃、冗談交じりでこんなふうに分の紹介をしていたことがあります。もちろんそんな会は存在しないし、私が会長であるはずもありません。でもその気持ちだけはいつも持っていました。

一般的に体育教師のイメージはどのようなものでしょう。そんな調査も聞いたことがないのでわかりませんが、私の耳に入ってくるのは

- ・ 体育教師は、体育のことしか考えていない。
- ・ 体育教師は、大会でいい成績を残すことに力を注いでいる。
- ・ 体育教師は、威圧的である。
- ・ 体育教師は、アタマが筋肉でできている。 等

という「体育バカ」的なマイナスイメージがけっこう出てくるのです。

確かにそんな体育教師もいるかも知れませんが、同じ体育教師としてはこのイメージは気分のいいものではありませんでした。だからこそ、同じ体育教師の仲間と力を合わせ「体育はすばらしい」「体育教師もなかなかやるな」というイメージを広げ「体育教師の地位を高める」ことに私は力を注いできたつもりなのです。

ただ、私は正確に言えば、体育教師ではなく小学校に21年間勤めてきた全教科を教える小学校教師です。だから今回の「体育教師に求められる教師力」のテーマにどれだけ迫ることができるかわかりませんが、体育を中心にしながら子どもを育ててきた一人の教師として考えを述べていきたいと思ひます。

### 2. 体育の学習で育てることは何か？

私は拙著「教師力を磨く」の中で、教師力とは「子どもを躍動させる力」と書きました。「躍動」には、理想、目標、夢、未来の要素が入っており、子どもたちが自尊感情を高め、未来に羽ばたく力をしっかりつけてやるのが「教師力」ととらえたのです。では「体育教師に求められる教師力」とは、いったいどういうものなのでしょう。

その前に体育の学習で大切なことを考えてみたいと思ひます。私は、もちろん運動技術の習得も大事だとは思っているのですが、それだけではなく、運動やそれに関連する行動を自分でとらえ、どう乗り越え、高めていくか、また仲間と一緒にどう考え、どう解決していくかの過程こそ大切な学習であると思ひています。教師がハウツー式の指導で跳び箱を全員跳ばせ、子どもたちが大喜びしたとしても、これは、子どもの大切な学習過程がとんでしまっているのです。どうしたら跳べるだろう、もうやめたい、でも友だちが励ましてくれる、先生も見ていてくれる、苦しいけどやってみよう、という子ども自身の試行錯誤や心の揺れ、喜びや悲しみ等の共有体験が大事なのです。この大切な学習過程の中にこそ、「生きる力」や「心の教育」があります。昨今の「いじめ問題」等の教育状況を考える時、道徳学習だけでなく、行動を共にしながら学習する体育の時間こそ大切にしなければならないのです。私は、体育の学習とは、行動

を通しながら「自分を育てる」ものであり「仲間を育てる」ものと思います。そして、その子の「未来に生きる力」を育てるものであると考えているのです。体育教師とは、けっして運動の技術を伸ばすだけではないのです。

### 3. 運動の一番苦手な子が生き生きと活動しているか

プロスポーツの指導者と学校の体育教師の一番の違いは、極端な言い方をすれば前者はトップアスリートを作り出すのが目的であり、後者は運動が苦手でも生涯にわたって運動を楽しみ自分の心身を大事にする人に育てること、そういう違いがあると思っています。これはスポーツの指導者を非難しているわけではありません。それはそれで大変すばらしいことですし、そんな専門的指導者がどんどん生まれてきてほしいと思っています。

私がここで言いたいのは、学校の体育教師が、自分もそんなスポーツの指導者と勘違いして子どもの技術向上ばかりに目がいく教師、運動の出来る子が中心になってしまう教師には、なってはならないということです。40人いれば運動の苦手な子もいます。そんな子も運動することは楽しい、しんどいこともあるけど仲間と一緒にいて楽しい、大人になっても運動を続けたい、そんな思いにさせてやるのが大事なのです。上手な子から下手な子までいろいろなレベルの子どもたちの気持ちをそれぞれつかみながら、そんな子どもたちをつなげ、一緒に伸びていく喜びを感じさせる授業の構築をすることがプロの体育教師なのです。理想すぎると言われるかも知れませんが、それを目指す教師でないと、運動の苦手な子にはいつも「体育は嫌い」の気持ちを植え付ける授業しかできないでしょう。

自分の体育授業がきっかけで、「トップアスリートになろう」と頑張る子どもの誕生もうれしいし、「運動は苦手だけど、体育は好きだし運動も続けたい」そんな子どもを育てることもうれしいのです。体育教師にはこの二つの喜びがあるのです。

### 4. 一人の喜びはみんなの喜び

ではそのためにどんな授業をすればいいのか。その方法はいろいろあるでしょうが、私が実践していた取り組みを少し例にあげてみたいと思います。

4年生の器械運動の授業でした。この日は台上前転に子どもたちの興味が集中し、ほとんどの班が台上前転を練習していました。その時私が指示したのは、「段数の制限」だけでした。あとは子どもたちに任せて、私は班を何度も回りながら、一緒に考え、悩み、気づかせ、元気づける、そんな活動をしていました。「台上前転はこれをこのようにすればできる」と最初から段階的に指導していけばきっと効率よく出来ていくでしょう。でも私はそんなふうに教えません。子どもたちに考えさせるのです。時間はかかりますが、必ず出来るようになります。この時も一人の子ども（A子）だけを除いて全員台上前転ができました。

そして時間がきて、私が「これで授業は終わり」と告げたのに、「A子に教えたい」と数人の子どもが体育館に残って教え続けたのです。するとそのうち教室に帰った子どもたちも全員体育館に戻ってきて、輪になってA子を応援し始めました。30分後、A子の体はふわりと跳び箱の上を回ったのです。その瞬間、クラス全員が「ヤッター」と大きく手をあげ笑顔が体育館中に広がりました。そばにいたB子は涙を出しながら「先生、一人の喜びはみんなの喜びだね」と話してくれました。

翌日の学級通信には、この出来事とA子とB子のコメントを載せましたが、そのあとに

私は次のような文を書き添えました。

人間という字は、人の間って書きますね。この人と人に間に温かい関係、つまり支え合う関係があれば、人間はがんばる力が出てきます、優しい気持ちが出てきます。そうして人間は強く大きくなっていくのです。

その後、子どもたちは国語の時間も算数の時間も教え合う学習を始め、互いを認め合い、支え合う学級をつくっていきました。体育教師には、人と人をつなぎ「仲間を大切に子ども」に育てる指導力も必要なのです。

## 5. 体育教師に求められる教師力とは

私は教師になりたての頃は、完全な「教え魔」でした。自分の持っている技術や知識を一生懸命に子どもたちに教え込んでいました。25m全員泳がせた、全員跳び箱を跳ばせた、逆上がりも全員できるようにさせた、ということに満足していました。子どもがつまづいた時、そのつまづきをすぐに解消してやり、出来た喜びを感じさせることに満足していたのです。でもそれはただの自己満足に過ぎなかったのです。教師の本当の役割とは、子どものつまづきをとるのではなく、子どもにつまづきを乗り越える力をつけてやることなのです。つまづいた時に自分はどのくらい頑張ればいいのか、つまづいた時にどう仲間と支え合っていけばいいのか、それを体育の学習を通して体験させてやることによって、その子に「生き方」を学ばせることができるのです。

30代半ばの時に担任したC子は、そんな「生き方」を体育の学習を通して学んでいった子どもです。その彼女が大学生になった時に「私の人生を変えた体育の授業」という文を書きましたが、その内容こそが「体育教師に求められる教師力」ではないかと思います。次の一部を抜粋し、本稿のまとめとしたいと思います。

一言で言うならば「ゴールパスゲーム」そして仲島先生との出会いは“人生の転機”でした。

今思い返してみると、それ以前の私は何事にも消極的で、ただおとなしい子どもでした。先天性下肢障害を持っていたことから、常に心の中に“私は何もできない人間だ”という諦めの感情が無意識のうちに巣くっていたのです。それに、何かあれば誰かがすぐ助けてくれました。私はそれに甘んじて、自分で自分を“駄目な人間”に仕立て上げ“妥協”を強いていました。でも心の中には、他の子と同じように走ったり動いたりできない自分への悔しさと、何かに挑戦して自分に自信をもてるきっかけが欲しいという気持ちがありました。そして「ゴールパスゲーム」に出会い、私は変わりました。最初は「私には無理だ」と思っていたパスやシュートも、何度も練習するうちにできるようになり、ついには勝利する喜びすら味わうことができたのです。このことで“一見、困難と思えるようなことでも、簡単に諦めず、まずは挑戦してみる”の大切さを実感しました。

もう一つ学んだことは、自分に“できないこと”の数を数えるより“できること”を見つけ、その“できること”に関しては努力を惜しまない前向きな姿勢を持つことの重要性です。私には“できないこと”がたくさんあります。体育の授業でいうならば、走ることや跳び箱を跳ぶこと、鉄棒での逆上がり等です。でも私には、全速力で歩くことや跳び箱によじ登ること、鉄棒にぶら下がることなら“できる”のです。自分で工夫したり、誰かに少し手を借りれば、私に“できないこと”はほとんどありませんでした。そして、自分のできる範囲のことには精一杯取り組むことが習慣的にできるようになり“自分にできないこと”を並び立ててクヨクヨするよりも“自分にできること”を探す方が、何倍も自分

を大切にした豊かな生き方ができることがわかったのです。

こうしたことを体育の授業、特に「ゴールパスゲーム」を通して学ぶことができたのは、仲島先生の存在があったからに他なりません。先生は、クラス全員に平等に目を向け、心を砕いてくださる“優しい”先生でした。でもけっして“甘い”先生ではありませんでした。特に私に対してはそうで、障害を持っていることで自分を甘やかすことは許されず、目の前に立ちほだかる困難に対しては、自分の頭で考え、自ら行動、挑戦し、時には積極的に人に協力を求めることが必要であることを教えられた気がします。先生は、私が困ったことに直面しても簡単には助け船を出してはくれず、ただ見ているだけということが多くありました。その“厳しい”態度はクラスの仲間たちにも伝わり、みんなが“本当の優しさ”を知ったことで、私たちは「支え合う仲間」という学級目標を実現できたのだと思います。先生は“自分を輝かせるのは自分自身であること”や“誰かの支えがなければ人は生きられない”ということを私たちに教えてくださいました。……(拙著「教師力を磨く」より一部抜粋)

体育教師に求められる教師力とは、  
子どもたちに『自信』と『勇気』をあたえ『生きる力』をつけること  
それをC子から、私は教えてもらいました。

※拙著「教師力を磨く～若手教師が伸びる10のすすめ～」2006.11 大修館書店